

景観フォーラム

巻頭言

史上最長政権が突然終了宣言をした後、殆ど独断と偏見で次の内閣総理大臣とやらが決まってしまう。この政治劇に国民は声を上げられることもなく、自民党員すら無視されたようであります。日本の民主主義もまだまだこの程度の段階かと溜飲が下がらず、何とも言えない気持ちになっておられる方々が何と多いことでしょう。前内閣が所謂“忖度内閣”と称せられたとするなら、忖度を実践してなった今度の内閣は“淫靡陰険内閣”と称してもいいでしょう。国民の声に従いながら・・・と言いながら、反対意見を表明する国民は知らず知らずのうちに粛清されるという構図が垣間見られます。これこそ淫靡陰険であることは間違いありません。

さて、政治には直接かかわりを持たない団体日本景観フォーラムではありますが、景観の中で最も目立つ存在として目に付く身近な電線・電信柱の問題を取り上げて極めて政治問題に成り得るかと言ってもいいでしょう。今からもう四半世紀前になりますが、阪神淡路大侵襲が発生した時、電信柱と電線が災害救助の最大な障害になり、その結果多くの人々が死傷した経験は全く政治には反映されておられません。この災害を基に電線の地中化が急速に実施されたという声はどこにも聞こえて参りません。これこそ政治が果たす役目ではないでしょうか。

議会の景観という観点から考えますと、イギリスを全面的に良しとするものではありませんが、あの英国議会のベンチ式会議場というのはなんと議会制民主主義を現わしているのではないのでしょうか。日本の国会では内閣のメンバーが壇上に収まり、国民の代表である議員を見下ろすというスタイルは全面的に英国のようなベンチ式に変えるべきではないのでしょうか。市民であることを忘れた国会議員が国会で坐する席をあたかも自らが所有する席の如く私物化して用いることは、国民から選ばれた意識を忘れさせるとんでもない道具と化していると言えないでしょうか。

日本景観フォーラムで実践しております“景観まちあるき”でいつも気付かされることですが、街で賑あう人々の顔は“国民”であることよりも“市民”であることが当たり前のように感ぜられます。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長 齊藤全彦

<日本景観フォーラム 2020 年度年間スケジュール>

*2020 年度とは 2020 年 4 月 1 日⇒2021 年 3 月 31 日のことです。

2020 年

- 4 月 24 日 (金) 第 1 回理事会・総会 於 JICA 研究所⇒延期
- 5 月 21 日 (木) **第 1 回景観研究会** (東京の景観) 於 JICA 研究所⇒延期
- 6 月 28 日 (日) **第 1 回景観まちあるき** (東京都内：?) ⇒延期
- 7 月 21 日 (火) 第 1 回理事会・総会 於 JICA 研究所 **第 2 回景観研究会** (東京の景観まちづくり) 於 JICA 研究所
- 8 月 夏休み (景観研究自由参加) or 一泊二日で遠方の町並み見学会など?
- 9 月 25 日 (金) **第 3 回景観研究会** (東京の景観) 於 JICA 研究所⇒延期
- 10 月 18 日 (日) **第 2 回景観まちあるき** (東京都内の近場)
- 11 月 20 日 (金) 第 2 回理事会・**第 4 回景観研究会** 於 JICA 研究所
- 12 月 17 日 (木) 忘年会 (? の居酒屋)

2021 年

- 1 月 21 日 (木) **第 3 回景観まちあるき** (?)
- 2 月 18 日 (木) **第 5 回景観研究会** (丸の内) 於 JICA 研究所
- 3 月 28 日 (日) **第 4 回景観まちあるき** (未定)

■以上のスケジュールは、提案ですのでこれから決定版を議論できればと思います。

スローな神様

豊村泰彦

われわれはどこからきたのか

私はかつて時間に追われる仕事をしてきた。その時はいつも走っていることが普通で、時々速度を上げたり、下げたり、一時停止したり、まるで車を運転するように仕事を操っていた。急ぐのが普通になっていて、たまにペースを落とし、ゆっくりしている自分を自覚すると、「こんなにのんびりしてよいのか」と叱咤する声が聞こえる。しかたなく、またアクセルを踏み直し速度を上げる。自分で自分を強迫しているだけなので、止めようと思えばいつでも止まることができるが、当時は止まらなかった。

その点、今の自分の身の回りの環境は180度違って、今すぐしなければならぬ仕事も義務もなく、心の中は工場内のすべての機械は停止し、静まり返っているような状態だ。そうすると今までは見過ごしてきた生活風景が細部にわたって見えるようになってきた。これまでスローライフという生活スタイルに憧れをもっていたが、その概念を捉えることができなかった。しかし、エンジンを切り、身体の動きをしばし停止してみると、その本質が徐々に見えてくる。

それは目の前のことに非常に重要な意味があって、差し当たってそこにある問題を見つけ出し、解決、処理することで、視界が広がり、次に自分がしなければならない行動が見えてくる。そのようなプロセスは時間もかかるし、面倒であるが、それがおそらくスローライフの基本なのであろう。

私の目の前のテーブルには、今日、スーパーで買って来た豚肉や大根やネギなどの食材が並べてある。腹が空いているが、そのまま食べられるわけではないので、それらを煮るとか焼くとかして、料理しなければならない。料理するという行動は食べるための手段というより、生活を豊かにするための主行動の一つであることに気づく。料理というプロセスを除いて肉や野菜を食べに行くのは野生である。あるいはゾンビである。ゾンビは、食べる本能だけで細胞が生き続けるため、生きた人間にかみつく。それに対して人間は本能で食べるのではなく、料理したものを食べている。

食材を調理し、食べられる状態にして、ようやく食事にしようとするのだが、その時周囲を見渡すと部屋が雑然としている様子にたまたま気が付く。しかし、目前に迫った食事を中断して気にならない程度に部屋を綺麗にしてから食べるか、まず空腹を満たしてから、部屋を掃除するか、迷うところであるが、これは本能の問題でも、理性の問題でも、ましてや物理的な法則の問題でもない。そこに優先順位をつけるとすれば、それは生き方の問題である、そこにスローライフの精神のようなものが存在するのかもしれない。



われわれはなにものか

コロナ渦であってもなくても、世の中の動きをいち早くを捉えようと思ったら、今はまずパソコンであり、スマホであろう。もうテレビの時代ではなくなっている。人とコミュニケーションをとろうと思っても、電話では簡単にとれなくなっている。こういう時代では、紙と鉛筆、原稿用紙と万年筆などの組み合わせは過去の懐かしき風景でしかない。今やデジタルが日本社会全体を覆っており、日常風景も昔とは大きく様変わりした。今年、菅内閣が発足し、早々にデジタル庁の新設をはじめとするデジタル化による省庁間、行政の縦割り打破などの方針が掲げられたが、ようするにこれまで民間で進めてきたデジタル化だけではスピードが遅いので、政府が情報のインフラ整備に積極的に乗り出してしていこうというものだ。例えば、役所などで続けてきた書類にハンコという仕事スタイルをなくし、デジタル情報だけでやり取りするシステムづくりなども提案されている。

デジタル化は世界の潮流でもあることからいずれはそういう時代がくるかもしれないが、自由主義の我が国においてそう簡単に従来のシステムが一変するとは考えられない。デジタルに関する認識は世代間でギャップが大きく、例えて言えば、私たち60代より上の世代は、どちらかというとも脳の基盤自体がアナログ構造で、デジタルの仕組みがなかなか理解できない。40代、50代の人でもアナログ回線は生きていて、仕事現場で苦勞する人が相当いると思う。そう考えると、全国一斉に短期間にデジタル社会に移行するのは難しく、その間隙を縫って、ネットを介したデジタル犯罪を蔓延させる危険性もある。デジタルは良い、従来のアナログ的なシステムは良くない、よって社会システムをデジタル化していこうという単純な方法ではかえって社会不安を増大させる結果になるのと考ええる。

ある情報を入手するのに、今はデジタルネットワークを使うことが最も早く簡単である。しかし、情報の信頼度からすると実際に自分の目で見たり、耳で聞いたことに劣る。直接確かめられない限りそこにフェイクが介入する余地がある。全く事実無根の出来事もデジタル世界では簡単に作りだすことができるのである。

例えば、ある人がネットでUFO出現の情報を入手して、人に「UFOが出現したらしいよ」という情報を伝えるとする。すると相手は「君、それを見たのかい」と質問を返す。それに対して、「見てないけれど、ネットの情報ではそうになっていた」と答える。ネットの情報を頭から信じると、事実であろうとなかろうとどんどん伝播する。フェイクな情報も、デジタル技術が上がれば、いくらでも現実感を作り出せる。かつて火星人襲来をテーマにした小説をラジオ番組で流したらを本物と思って大騒ぎになった事件は、当時はラジオが最先端の伝達メディアだった。最近では、ネットから送られてくる情報の中に迷惑メールが混入し、それがなりすましなのか本物か分からなくなっている。なりすまし側の手口はますます巧妙になり、だんだん個人では判別が困難になってくる。そのうち神にしか分からないようなフェイク情報がネットでどんどん送られてくる時代も来るかもしれない。



われわれはどこに行くのか

私たち 60 代超えの人々は、デジタルの情報を完全に信用することはできない。それはアナログ人間だからだ。メディア側は映像情報に手を加え仮想現実を作り出し、それを現実として信じ込ませることができる。今後、人類が火星に人が降り立ったことを報道する番組があっても、メディアは全体にうその情報を流さないという確信があっても初めて信用するのだ。米国のトランプ大統領はよく自分にとって都合の悪い報道がなされるとそれはフェイクだとして全否定するが、それはメディア情報を自ら信用していないだけでなく自分も意識的にフェイクな情報を発信し続けているからだ。デジタル技術はおそらくさらに巧妙に仮想現実を作り上げ、現実として発表することもでき



る。それに対して、市民が疑わないのはこれまでもこれからも未来もメディアの良心を信じているからに他ならない。

デジタル時代を生きるために重要なことは、デジタルの利点だけを見ては危険であるということである。メディアやネットで間接的な情報を得ても頭から信用するのではなく、疑問を持つことは今後ますます必要になってくる。メディアからの情報を鵜呑みにするだけでなく、現実社会を自分の足で歩き、目で見て、人と接しながら実体験として現実を直視し、理解していかないと、良い方向にはいかないと思う。殺人事件の犯人を追うベテラン刑事は現場百篇、足で稼ぐが、実際に自分の目で確かめることが大事なのだろう。これは私たちのように景観に関心のある人たちにとっても同様で、景観は足で歩くからこそ分かる。

ネットで調べるとたくさんの画像を得ることができる。でもその画像は時間的空間的に切り取られた画像であり、対象物は本物かもしれないが、周囲の環境を含めた景観を含めると、その評価や価値判断はもっと細微かつ総合的な情報が必要である。それは映像でも同じである。つまりネットによるデジタル情報は本当に知りたい情報かどうか簡単に判断できず、この段階では提供者側からの情報の一片にしか過ぎないのである。景観に関しては、目、鼻、耳をフル稼働しアナログ的な感性で総合的に判断することが重要なのだとあらためて感じる。

「茅葺の壁面活用による街並み景観の変革の可能性」

東海林伸篤
(一級建築士)

美しい景観と自然素材

SDGs (Sustainable Development Goals)、すなわち「持続可能な開発目標」により、地球に住む人々の諸活動を制御、誘導していこうとする試みが世界的に始まっています。

景観は人々の営みを体現するものですが、「景観が美しいかどうか」という直感は、結果としてサステイナブルかどうかという根本につながるものであるような気がします。それは、調和がとれているかどうかを、遺伝子レベルで感じているということかもしれません。

美しい景観といったときにまず思い起こされるものは、ヨーロッパにある石畳と石造りの家並みもさることながら、古き良き日本の景観ではないでしょうか。それは日本人にとっての原風景ともいえます。例えば、田畑の中の防風林に囲まれた土地にひっそりと建つ木造家屋。あるいは、岐阜県の白川郷など茅葺き屋根の家々が集落としての一体性をつくりあげた景観。川越に代表される黒瓦と白漆喰の蔵の町並みなど。これらの美しさは、いずれも自然素材を基調とした景観です。

こうした地域性に基づく、美しいサステイナブルな景観が失われてきた背景としては、二つの大きな側面があると考えます。

一つ目は、鉄やコンクリート、ガラスやプラスチック等の生産技術と、鉄道・船・自動車等の普及による流通網の発達です。利便性やコストとのバランスなど、人々のニーズを反映した結果として、一つの地域においても、世界各国からの素材の流入とともに、様々なノウハウや技術が参入し、その地域の景観の全体バランスが崩されてきたと言えます。

二つ目は、建物の不燃化の必要性です。日本の都市は地震や火事との闘いの歴史の上に成り立つといっても過言ではないと思われませんが、建物を燃えにくくす

る取り組みが、自然素材の利用を阻んできたように思います。

1950年に制定された建築基準法は、国民の生命、健康および財産等を守ることを目的として定められたものですが、この中では建物の防火や不燃化に関する基準が、大きな比重を占めています。また、公共建築を作る際の指針となる国土交通省大臣官房官庁営繕部の標準仕様書も、これまで燃えない材料である鉄とコンクリート等により建物をつくることを基本としていました。

しかし、冒頭に述べたSDGsの影響も受け、時代の流れは変わりました。「公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律」が2010年に国会で成立し10年が経過する中で、公共建築をはじめとする大規模建築物への木材利用が広がりを見せています。

【写真1・2】

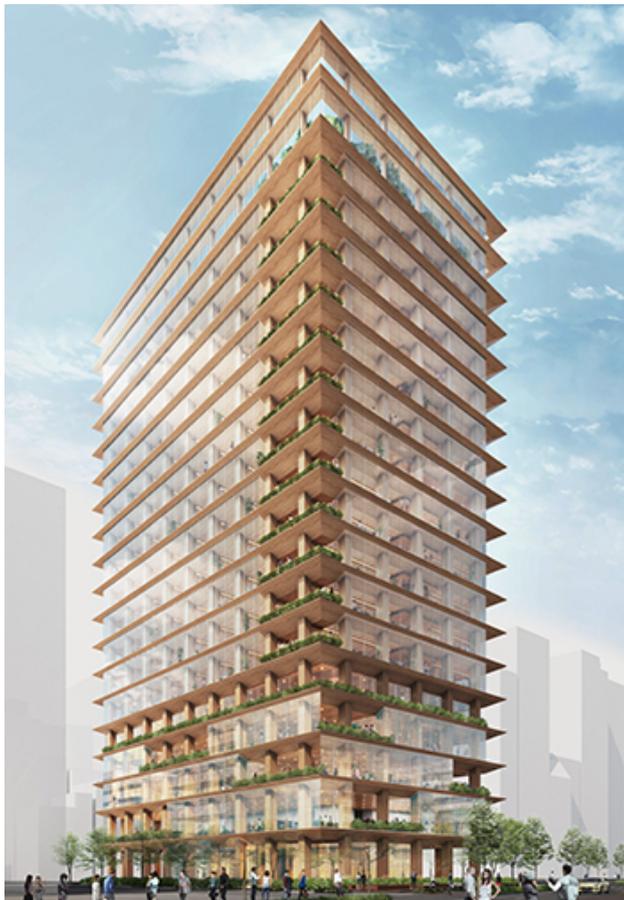


【写真1】大阪木材仲買会館（設計・施工：竹中工務店）（引用：公共建築協会ホームページ「第16回公共建築賞 受賞建築物」 https://www.pbaweb.jp/pb_date/award/history/_trashed/）



【写真2】大阪木材仲買会館（設計・施工：竹中工務店）（引用：公共建築協会ホームページ「第16回公共建築賞 受賞建築物」 https://www.pbaweb.jp/pb_date/award/history/_trashed/）

また、木材の不燃化技術をはじめ、木構造に関する研究も進み、最近では、大企業が相次いで木造の超高層建築物の計画を発表しています。【写真3】



【写真3】三井不動産と竹中工務店が計画する木造賃貸オフィスビル

（引用：https://www.mitsufudosan.co.jp/corporate/news/2020/0929_02/）

自然素材の活用の利点は、何と言っても自然の循環です。木材についていえば、植林され大きく育った木々を使うことで、林業の雇用が確保されるとともに、森林の再生が進み、山々の景観が保たれ、斜面にしっかり根付いた木々が土砂崩れ防止の役割を果たすとともに、水質が改善されます。木々は育つ過程でCO₂を吸収し、建築資材として利用されればCO₂は固定化され地球温暖化防止への一助となります。また、木材の使用には調湿性、断熱性、抗菌性、ストレスの緩和などさまざまな効果があります。

既存建物への茅葺の壁面利用の可能性

木材の活用の広がりはいまさら期待されるどころですが、さらにもう一步、自然素材の活用が進まないかと考える素材が、茅（かや）です。とくに既存の建物を壊さずに景観を一新する手段として、茅葺の壁面利用が促進されないかと考えます。

茅の材料は、ススキや葦、稲わらや小麦わらなどであり、茅葺きにはそれらを束ねたものが使われています。

最近の事例では、東京都渋谷区で株式会社マザーディクショナリー（代表：尾見紀佐子氏）が運営する2つの施設の壁面に茅葺が活用されています。10代の若者と社会で活躍する大人の世代を超えた交流の場として運営される代官山ティーンズ・クリエイティブでは、既存コンクリート建物のエントランス部分の門構えの壁面の一部に茅を葺きワクワク感を演出しています。【写真4】また、子育て世代のたまり場・学びの場である景丘の家では、茅葺屋根のユニークなデザインを外壁にあしらっています。【写真5】いずれも茅葺職人として国内外で活躍される相良育弥さんのデザイン・制作によるものです。



【写真4】渋谷区内施設「代官山ティーンズ・クリエイティブ」壁面／相良育弥氏デザイン・制作

(引用：https://daikanyama-tc.com/wp-content/uploads/IMG_9664.jpg)



【写真5】社会福祉法人所有施設「景丘の家」壁面／山崎智貴氏、相良育弥氏デザイン・制作

(引用：<https://hellolife.jp/company/34098.html>)

本体の外壁は不燃材料である鉄筋コンクリート造であり、構造体の不燃化性能には影響を及ぼさない形で使用と解釈できます。防火地域内においては、茅の

使用が工作物とされる場合には、使用高さ3mを超えるものは不燃材料である必要があり、使用範囲の制限も必要ですが、今後、不燃化技術の開発等も進むことで、茅葺の利用促進が待たれるところです。

建物を風雨から守るために使用される塗料や防水材料は、石油を原料に製造されたものであり、使用後は産業廃棄物となります。一般的に今、工業製品として流通する防水材料・工法等の性能保証期間は10年。大規模改修等での壁や屋根のメンテナンスは10～15年サイクル程度でおこなわれるのが理想です。これに対して茅葺は、一般的には20～30年であり、部分補修も加えればさらに長く持たせることが可能とも言います。

茅葺職人の相良育弥さんは海外の茅葺職人との交流も通して、様々な茅葺の可能性を探求されています。そして、国内では、壁面の茅葺を造形的に仕上げ、見せる作品づくりも行っています。【写真6・7】



【写真6】美容院の茅葺きの壁（神戸市）／相良育弥氏デザイン・制作

(引用：<https://hellolife.jp/company/34098.html>)



【写真7】美容院の茅葺きの壁（神戸市）／相良育弥氏デザイン・制作

（引用：<https://sunchi.jp/sunchilist/hyogo/107591>）

既存建物の壁面に茅葺を設置すれば、同じ材料でありながらその表現を競い合うことも可能です。そして無機質な都市空間が有機的なものになり、都市景観が一新されるはず。また、多くの建築物で使用されれば、広大な土地を有する地方都市に新たな産業が生まれ、雇用が確保されます。茅の材料であるスキヤヨシが育つ草原や湿原には生物多様性が確保され、茅は使用後も廃棄物にならず土に還ります。外壁面に茅を使用することで、建物は外断熱となり、断熱性能が向上します。

茅葺の現代社会への普及に向けて

エシカル消費という言葉があります。環境にやさしく社会貢献につながる買い物を指す言葉です。扱う対象や材料は異なりますが、マザーハウスの山口絵理子さんは、バングラディッシュなど発展途上国の人々と共に開発したバックを先進国で販売し、作り手の尊厳や誇りを育て、共に豊かな社会を作るというビジネスモデルを展開しています。バックにつかうジュート

（麻の一種）は、木材に比べてCO₂吸収量が5～6倍あります。ジュートを使用したバックを買うことで社会貢献につながりますが、山口絵理子さんの考え方は、社会貢献意識で買ってもらうのではなく、あくまでもデザイン性や機能面などの商品力で勝負するというものです。

茅葺もまた、デザイン面、機能面（断熱性）、において優れた素材・工法です。持続可能な循環型社会の実現に向け、多様な人たちの知恵や技術を結集し、誇れる未来を子供たちに残さなければなりません。木材利活用に加えて、今、茅葺の商品力を磨き普及させる取り組みが必要と考えます。

<参考・引用文献等>

- 1) さんち〜工芸と探訪〜「今、茅葺き屋根は世界のトレンドに。職人・相良育弥が伝える「茅葺きの魅力」」
<https://sunchi.jp/sunchilist/hyogo/107591>
- 2) 神戸新聞 NEXT2019/10/23 「茅の魅力や良さ発信 神戸と世界つなぐ茅葺き職人の挑戦」
<https://www.kobe-np.co.jp/news/kobe/201910/0012811790.shtml>
- 3) ハローライフ「株式会社くさかんむり／自然の中で、自分にウソをつかずに働く。手をかけただけ確かな成果を実感できる、茅葺き職人の仕事。」
<https://hellolife.jp/company/34098.html>
- 4) 代官山ティーンズクリエイティブ
<https://daikanyama-tc.com/>
- 5) 景丘の家
<https://kageoka.com/>
- 6) 公共建築協会ホームページ「第16回公共建築賞受賞建築物」
https://www.pbaweb.jp/pb_date/award/history/_trashed/

<LFJブックレビュー 67>

『景観からよむ日本の歴史』 金田章裕著 岩波新書 2020年7月刊

斉藤全彦

著者金田章裕氏は人文地理学・歴史地理学の泰斗である。ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュが1922年に『人文地理学原理』を刊行し“景観”を学術的に研究する必要性を説いたが、ほぼ百年後の現在に至っても景観は学として独立してはいない。景観を学たらしめるにはどうしたらいいか。「景観は、さまざまな時期に、さまざまな経緯によってつくられた、さまざまな要素から成っている」ゆえに著者は先ず「景観史」として、どのように景観が成り立ってきたのかという景観の歴史という観点から考察しようとしている。「風景」は個人的・感覚的な把握により成立したものである故に歴史という捉え方は不可能であるが、「景観」は客観的把握である故に歴史が可能となる。

第1章“景観史へのいざない”では日本では、8世紀の基本的法律である「大宝律令」制度として林と森を区別してきた。樹木を植えたり手を加えたりしたところを「林」といい、自然景観の「森」と文化景観の「林」を識別してきた。また、景観はいろいろな要素をもち、その要素が時間的経緯を経るうちにそれが歴史として立ち上がることになる。景観は時間的に変化する訳である。

第2章“古地図からよみとく景観史”においては、過去の地図から文化的景観を探し出す作業を実施する。古い地図には、そこに生きる人々の公的な生きざまが記してある。古代日本の土地管理システムなどから様々な景観要素を紡ぎだし、中世の地図からは境界認識、近世の地図からは町や村などの集落の動きや城下町の絵図などが検討され、江戸から明治に移行された時点では、時代がいかに混乱していたかを地図から読み取る。

第3章“景観史の画期を演じた人々とその舞台”として、東大寺に引き継がれた長大な灌漑溝と墾田を残した人物として生江臣東人（いくえのおおみあずまびと）、開拓によって異例の昇進を果たした地方豪族の礪波臣志留志（となみのおみしるし）、武家の都鎌倉建設を成し遂げた源頼朝、京都の堤防のように見える御土居（おとい）がどのように秀吉によって作られたか、そして徳川家康にとっての江戸の町づくりが日本橋から始まったこと、武蔵野台地を新田に作り変えていった柳沢吉保の仕事ぶり、その他近代の入植や技術を推進した人々の歴史を振り返る。

第4章“景観から読みとく地域のなりたち”では長良川下流地域がどのようにして洪水と格闘してきたか、鋳物の職人町としての金屋町が千保川をどのように活用してきたか、漁港に交錯する商港の面影を残す鞆の浦、町並みと賑わいとして近江八幡・三国・内子などを取り上げている。そして最後にこれらの作業の裏付けとして、第5章“景観史の資料と考え方”を提示する。景観史の視点から先ず村落景観から考え、その変化を通じて国家がどのように税を取り立ててきたかを地名の成立と変遷から考察する。

著者は自然景観に対する文化景観から本書を語ってきたが、地域における人々の生活または生業および風土により形成された“文化的景観”を文化景観と分別することによって、景観の本質をより明らかに提示することが可能であると提唱している。



天地玄黄

NO.25 「遊悠散歩・日々雑感① ー川瀬巴水展をみてー」

野田路人

新型コロナウイルス感染拡大防止の為7月に開催予定だった特別展が内容を縮小し8月18日から9月22日に大田区立郷土博物館で開催された特集展示「川瀬巴水ー日本を歩くー」を見てきました。

展示は、描いた風景版画を約50点、旅に出る際、いつも持ち歩いたスケッチ帖もご紹介し、どのような過程の中で作品が生まれたかについても判る様にしていました。

川瀬巴水（本名：文治郎、1883-1957）は、美人画の鏗木清方に師事し、師より「巴水」の画号を与えられました、同門の伊東深水の版画「近江八景」に影響を受け版画家に転向、当時浮世絵版画は衰退の一途を辿っていましたが、大正8（1919）年から新版画の制作に携わり幼い頃によく滞在した栃木県塩原を描いた風景版画「塩原おかね路」、「塩原畑下り」を製作、これらを第一作として終生、夜、雪などといった詩情的な風景版画を貫き、旅を愛し、日本国内を歩いた巴水は伊東深水からは「旅情詩人」と評され、「日本風景選集」「東京二十景」など大正から戦後にかけて600点以上の作品を残しました。その多くは、版元・渡邊庄三郎のもとで生み出され、近年、国内外で高い人気を得ています。



巴水は、関東大震災で被災し、1926年(大正15年)に大森新井宿子母沢(現・大田区中央4-12)に住み、その後、昭和5年(1930)(昭和5年)に馬込町平張975番地(現・南馬込3-17、区立馬込第二小学校の裏あたり)に洋館の家を建て引っ越しています。第二次世界大戦中は那須塩原に疎開しましたが、戦後、昭和23年(1948)から池上町1127番地(現・上池台2-33 都立荏原病院の側)に戻り、昭和32年(1957)74才でこの地で没し、多くの時間を大田区内で過ごしました。大田区に縁が深い画家として、大田区立郷土博物館は多くの作品を所蔵しています。墓は万福寺(世田谷区烏山町)にあり、「旅情の版画家川瀬巴水を偲び」の碑がある様です。

今年、3月に日経新聞の文化欄の「新版画」特集で、巴水の作品として紹介されていた「東京二十景 芝増上寺」は巴水の代表作として、深々と降る雪、風に舞う雪の風景は心に響き、ポスターやカタログの表紙にもよく使われています。

又、1952年（昭和27年）、無形文化財技術保存記録の作品に認定された「増上寺の雪」は配置されている人物のスケッチも合わせて展示され、当時の様子をより伝えていますが、現在同一のアンゲルからではビルが三門の後方そびえ、東京タワーも見え隠れし、今となっては同じ景色を見る事はできません。

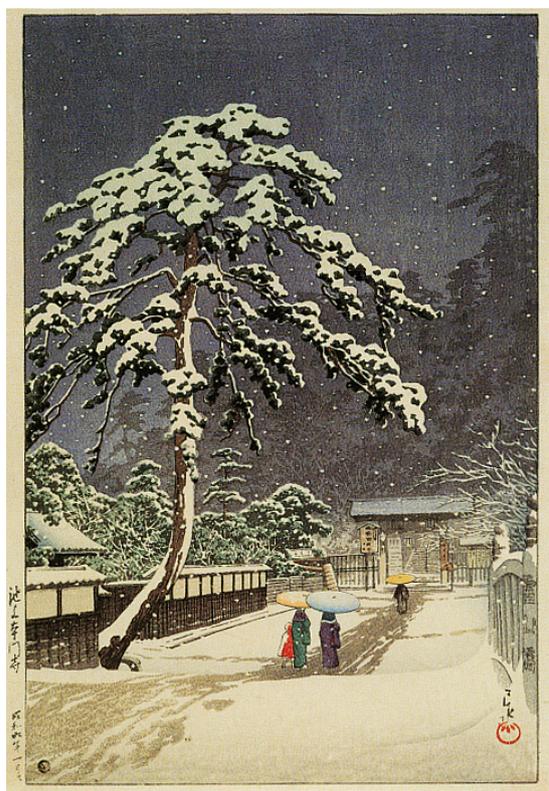


「増上寺の雪」



(現在：Google Maps ストリートビューより)

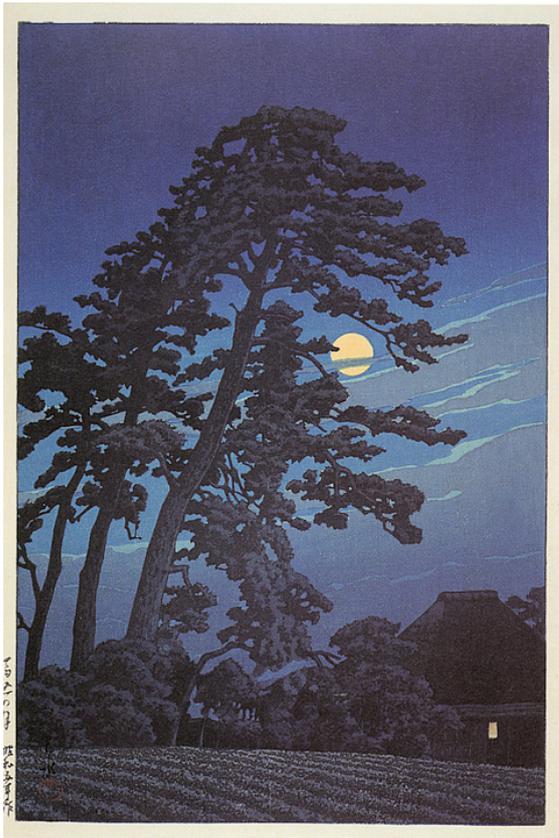
巴水は、大田区内でも「東京20景」で13点の作品を残しています。



「池上本門寺」



(現在：Google Maps ストリートビューより)



「馬込の月」

昭和5年（1930）に制作された『馬込の月』は、この地区が戦前から戦後にかけて耕地整理などにより再開発され、描かれた三本松も失われ、現在は住宅街となり、正確な位置は不明でしたが、その後、北馬込2丁目28番の天祖神社が『馬込の月』の場所であると確定されました。また、川瀬巴水自筆のスケッチに『馬込堂寺』と書かれおり、五反田方向から横浜方向を見てスケッチをしたと考えます。

（下の地図参照 上が荏原町方向、右側が五反田・品川方向、下側が馬込・大森方向である。）



現在、川瀬巴水が目にし、作品とした古き良き日本の風景の多くは失われてしまいました。戦後の経済成長のスクラップ&ビルドと共に、風景、景観を大きく変え、これからも変わって行くと考えます。

寺社仏閣は長い年月、火災や天災などを経ながらもその姿を残し、近年の「歴史的建造物」保存や「日本遺産」の指定なども景観へ大きく寄与しておりますが、景観を作り出す構成要素は自然物、人工物など多くの物があり私たちは何が残せ、何を誰が残すかはこれからも大きな課題と考えます。

パスカルの「人間は考える葦である」の言葉の「考える」は人間の本质となる大切なことですが、日々の生活の中、自分の行動に集中して目を向けその意味合いなどあれこれ考えずに、過ごしています。

ゆとりのある時に、自分の行動や生身の回りの事を改めてあれは何かと、思考回路にスイッチを入れると、今まであまり気に留めていなかったようなことでも、結構色々な考えが頭に浮かび、新しい意味合いに気づくこともあり、ベースとなる事や不明な点を改めて調べる事にもつながります。又、自分の考えた事を、文章にまとめるとよりより自分の考えが深まります。これを造語として「遊悠散歩・日々雑感」と名付け、遊び心とゆとりを持ち、日々思考回路のスイッチを極力入れるスタンスを心掛けたいと思っております。

文章の上手い下手や、書く事の好き嫌いで会報の原稿を書くのではなく、会員メンバーや、会報を読む方が、自分の意見や考えに対し他の方が別の考えを持ったり、活発な意見交換の場となり、忌憚のないご意見を頂くきっかけになればと思います。

〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町 14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

URL : <https://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan